

《3》 横浜でつながりを創る人々に何う

① 地域ケアプラザのコーディネーターとして、百年先にも続くまちのつながりを「地域の中の『何でもない存在』になり信頼関係を築く」

つながるきっかけづくりを14年

私は、地域ケアプラザ（以下「CP」）の地域活動交流コーディネーター（以下「CO」、45ページ参照）をしています。

COになる前は、事務の仕事と専業主婦をしていて、COについては全く知りませんでした。福祉の仕事に興味があり、応募したらなれてしまったというのが正直なところ。仕事の辛さよりも、色々な人に出会える楽しさの方が勝っており、周りからも言ってもらえるのですが、天職なのかもしれないと思っています。地域活動交流事業（以下「地域交流」）の対象は、地域の人が全員、そして地域の人たち全員、そして地域の人たち全員、一人ひとりに関わりながら、その人の良さをみつけ、他の人とつながれるような「きっかけづくり」を丁寧にしてきた14年間だったと思います。



商品開発部作業風景

つぶやきが輝き出す瞬間

COが動き出すとき

私は、常に、たくさんの方のつぶやきを聞いて、浮かんだ気づきやアイデアをネタ帳に書き、自分の中に蓄積しています。驚くことに、それが、地域の人々の考えとぴたり合わさる時があるのです。こちらの思いを一方的に働きかけるのではなく、相手の思いに、良いタイミングで、いかにフィットした提案ができるかが大事です。こういう

ことをやったら地域の方が幸せ

かな、地域が活発になるかなと考えながら、自転車ですりすり回っています。

ある時、高齢者の方々が「私なんか年をとって行くだけ」と寂しそうにつぶやかれています。その方々は手作業が得意なので、何か生かせないものかとずっと考えていました。そんな時「障害児者施設等で、作り途中の手芸作品があるが、人手が足りなくて商品開発ができない」という話を聞いたのです。「います！商品開発ができる人たちが！」とすかさずつなげて。作品の仕上げをおばあさん達が行い販売することになりました。それはおばあさん達の生きがいにつながり、今では、被災ボランティアなど、幅を広げて活動しています。また、商品開発を通して感じたことを他の方に伝えることで、障害者の方への理解が広がりました。

「地域の日常の中にある」

専門職だからできること

人は生まれて死んでいき、地域は絶えず変化していきます。様々な人と関わる中で、専門職である自分は何をしていくべきか。まず、「ケースワークの7原則」にある「自分の価値観を押し付けない」「他を審判してはいけない」等の基本的な姿勢は、COも共通して、大切にしなければならぬことだと思っています。

COの強みは「地域の日常の中にある」ことだと思っています。行政でもなく地域住民でもないポジショニング、何かあった時に行ける場所にあるCP。そして「CO」という肩書は地域の人から「関係ない」と言われません。仕事でありながら、地域の皆さんと同じ位、まちを良くしたいと思う気持ちを持っています。「関係あるもん！」という気持ちで地域に入っていく、

土屋 環さん

平成13年の東寺尾地域ケアプラザの開所とともに、地域活動交流コーディネーターとなる。生麦第二地区連合町内会を担当。「ケアプラザの土屋さん」と呼ばれながら地域を駆け巡る日々を送る。



聞き手

大橋 直之

健康福祉局地域支援課担当係長

前田 雅美

健康福祉局地域支援課

小林 千尋

鶴見区福祉保健課

時間をかけて「信頼関係」を築けます。

そして、専門職としての冷静さや地域を分析する視点、数値も大切にしつつ、すぐ先から100年先まで、何段階もの目標を地域の方と一緒に考えるようにしています。例えば、人口動態を出して地域の皆さんとこの町のことを考えると、新たな気付きが生まれます。「将来この地域はどうなるの?」「やらなきゃならないことは何?」と。地域にはゴールがないので、様々な人の様々な取り組みを、自然な形で少しずつ高めること

によって、地域が良くなってくれば良いと思っています。それから、表面化しないニーズにも、もつと目を向けていきたいと思っています。このようなニーズへの対応は、より専門的な知識や連携が必要なが多く、敷居が高いと感じてしまいがちなのですが、そうなる前にもできることがあるのが地域交流だと思っています。

ニーズの掘り起こしに、アンケート調査(上級編研修(46ページ参照)内で実施)を使い効果を得られたことがあります。障害児余暇支援事業で重症心身障害や肢体不自由のあるお子さんの参加がなかったことや「うちの子はCPにはいけないから」と、お母さんがつぶやかれてい

たことがずつと気になっていました。そこで「参加しやすさ」という視点で様々な場で調査し、体調不良に対応できる柔軟なプログラムの企画(ソフト面)や駐車場の確保(ハード面)、そして参加できることが分かる明確な周知を行うことにしました。すると「以前もチラシを見ていたが諦めていた」「地域で仲間づくりをしたかと思っていた」という親子が参加してくれるようになったのです。

このようにC.O.は「地域の日常の中にいる」からこそ、本当のニーズをさり気なく掴んで、本当の願いを叶えるお手伝いができるのだと思います。そして、思い浮かべているのは、Esra Small Worldが聞こえてくるようなまちです。皆がここに挨拶して、誰か転んだら走って助けにいく、犯罪なんて起こるわけがない「安心の雰囲気」が溢れ出る仲良しのまち。誰もが持っている「温かい気持ち」を引き出していくイメージです。

C.O.の醍醐味

「何でもない存在」になる

最初は自治会町内会長さんを怖いと思っていたこともあり、地域に向くことが苦手でした(笑)。でも、他のCPに見学に行き、勉強し、やはり、会ってお話するのが一番だと気付い

て、何度も地域に通いました。そのうち、お茶をだしてもらわなくなり、何気ない用件を任せられ、相談をされたり、褒められたり、段々家族のような雰囲気になりました。そして5年目のある日、ふと、地域の人にとって「何でもない存在」になれている自分に気付きました。

自治会町内会と立ち上げた寺尾奉行(注)の取組は、たくさんの方の「つながり」をつくり、まちに愛着を持ってもらうことができましたが、時として、担い手さん同士、思いが一致しないこともありました。そのようなときは、双方の良いところを探し通訳して伝えるなど、一歩引いた立場でフォローするのがC.O.ならではの役回りです。そして、C.O.の存在価値を感じられるときでもあると思います。

私を支えてくれる人たち

C.O.はいわゆる「一人職場」



寺尾奉行まち歩き

ですが、私は「一人じゃない」と思える環境に、とても感謝しています。CP内では、各職種の職員が支え合いながら仕事をしていますし、自分が支えているはずの地域の皆さんに、育ててもらってきたと感じています。愛のムチと絶妙なタイミングでの励ましの言葉に、感謝する毎日です。

また、鶴見区のC.O.連絡会の存在がとても大きいです。思うように進められず壁にぶつかった時にアイデアを出し合ったり、些細なことを愚痴り合える大切な仲間です。新人の頃、鶴見区に限らず、先輩C.O.にとってもお世話になりました。優しく何度でも話を聞いてくれたことがとても嬉しかった。だから私は、後輩の話を知りたいし、相談してもらえたい人になりたいと思っています。

実践と理論をつなぎたい

今後は、実践と理論をつなぎ

C.O.の意義を分かりやすく伝えられるようになります。C.O.の仕事は、感覚だけではなく、理論や知識も必要です。自分の動きや目標を、記録、分析し、他の人に伝えなければなりません。そこですべて初めてC.O.の価値を証明でき、全体が働きやすくなると思います。そして、今届いているニーズ

に答えるだけでもとても忙しい毎日ですが、自分で声をあげることもできない方も含めて、もつと多くの人に関わってほしいような気がします。

最後に、役所の皆さんとは、共に考える関係でいたいと思います。区役所の方と他愛のない話ができること、当然のように思えて大きいことです。区の地区別支援チームでは、地域の人も私たちもリーダー役の区の管理職の熱意に動かされます。CPと、役所がお互いの良いところを生かし合えるような関係性をつくり、地域の皆さんのつながりづくりをお手伝いしていきたいと思っています。

「インタビューを終えて」

人をつなぐには、まず、信頼関係が大事であることを改めて感じました。連携、協働の前に、信頼関係。焦らず一歩一歩進めることができる我慢強さに脱帽です。(前田)

(注) 寺尾奉行

鶴見にお世話になったので何か残したい、地域を知って愛着を持ってもらいたい、という自治会町内会長の想いが詰まったプロジェクト。平成25年度から、まちの歴史や調れを書いた高札を計17本設置。平成26年度「高札巡り」馬場の赤門祭等イベント開催。平成27年度「寺尾奉行音頭」を作り、自治会町内会の盆踊りで踊ることに。自治会町内会長はいつの間にか「お奉行様」と呼ばれるようになっていく。